



校長 酒井 治 己

本日ここに、平成30年度 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産大学校の入学式を挙げるにあたり、水産大学校校長として式辞を申し上げます。

本科193名、専攻科50名、水産学研究科8名の新入生の諸君、水産大学校の教職員一同、心から入学を歓迎します。これまでの道のりを支えてこられた保護者の皆様にも、心からお祝い申し上げます。

また、水産庁の 井上清和 研究指導課長、芳田直樹 下関市副市長、水産研究・教育機構の 宮原政典 理事長、水産大学校後援会 濱田盛承 理事をはじめ、ご来賓の皆様にはご多忙のところご臨席賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、国立研究開発法人水産研究・教育機構の人材育成部門である水産大学校は、今年で創立77周年の歴史と伝統を誇る我が国唯一の水産高等教育機関です。水産教育一筋に邁進し、これまで水産業界で活躍する約1万名の卒業生を送り出してきました。

本校は、大学改革支援・学位授与機構から学士及び修士教育課程としての認定、また、日本技術者教育認定機構からも継続認定を受け、充実した水産教育を行っていることが保証されて

います。諸君は、立派な水産人となるため、理想的な学びの場を得たこととなります。

諸君は、約5倍の志願者の中から入学を勝ち得ました。さぞ多くの時間を「勉強」に割いたことと思います。「勉強」とは「強いて勉める」と書きます。それは、受験の必要に強いられたものであったはずです。これから諸君が本校において修めるのは「学問」、すなわち「学び問う」行為を通じての水産学です。

本校は、実学教育を旨としています。水産学とは、水産に関する実学です。実学とは、すなわち実際に役立つ学問を言います。様々な基礎知識を土台に、水産の現場で活躍できる技術と知恵を身に付け、さらに現場の課題にあたっては、知恵と経験と人脈を総動員して問題を解決できる能力を身につけるのが、水産における実学教育です。

本校は、海洋生産から水産機械、食品加工、資源生物、流通・経営まで、水産界を網羅した五学科のもと、優秀な教授陣と、広いキャンパス、二隻の大型練習船、さらに実験実習場などを整えています。諸君には、本校の充実した教育体制と、機構の広範な研究体制のもと、「水産学」をしっかりと学び、社会に巣立つ準備をしていただきたいと思います。

ただし、私達が、完全食品のような教育を与える事ができるとは考えないで頂きたい。諸君も、与えられた知識を、ただ餌のように食べるだけでは、それは「飼育」と同じと思って下さい。私達にできるのは、せいぜい諸君を目覚めさせることです。そこからが、諸君が自ら求めて学び問う、生きた学問となる事を、胆に銘じてほしいと思います。

言うまでもなく、水産業の果たすべき役割は、人類の生存に不可欠な海洋生物資源を安定的に供給することです。しかし世界は、人口の爆発的増加や地球環境の劇的変化など、多くの問題を抱えています。

そんな中で、「持続可能な社会」を実現するため、地域にあっては、現場に密着した活動を通して生態系と調和した持続的水産業の推進を図ること、国際的には、各国と協調して限られた海洋生物資源を適切に利用・管理していくことが、水産学を学ぶ私たちに課せられた重要な課題です。

私達も、教育・研究を通して、諸君と一緒にになって様々な課題解決に取り組み、万全の態勢で皆さんの希望と期待に応えたいと考えています。

水産都市、下関の地の恵まれた現場環境と学習環境の中で、自らの夢の実現のため、「志」を高く持ち続け、決して後悔しない学生生活を送るよう、諸君の健闘を心より祈念し式辞といたします。